

日英語での目的語に対する述部位置 (他動詞構文の2類型化)

河本 誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2012年10月1日受付、2012年11月1日受理)

概要

他動詞が文の全体的事象を叙述するものであると見れば、目的語とその述部とは全体事象の中の部分事象を叙述するものである。この全体事象 vs. 部分事象という観点から他動詞文の文構造が2つに分類できることを主張する。それらは1つが SVO で、もう1つが SVOC の拡張型である。また、部分事象が4つのタイプに意味的に分類できること、日本語においても部分事象を叙述する位置が文内に存在することを主張する。さらに、SVOC の受動態は、OC が表わす部分事象を表層化させる文であることなど部分事象に絡む様々な言語現象を説明することにする。

[1] 英語の SVOC の構造の特徴：全体事象の後に部分事象

英語においては、従来から次のような SVOC の文構造が把握されてきている。この構文中で C は目的(格)補語で、目的語に対する述部として機能する。C には次のように、形容詞、名詞、不定詞、分詞など様々なものが来ることができる。(以下すべての英文の例文とその日本語訳に関し、断りを書いていない限り、参考文献で挙げた2つの辞書から引用を行った。)(各例文の後の φ、BE は O と C との間の意味的な関係を示す)

- (1) Her jokes made us all laugh. (φ)
彼女の冗談で私たちはみな笑った。
- (2) Try to make your work a pleasure. (BE)
仕事を喜びとするようにしなさい。
- (3) I couldn't make myself understood to them. (BE)
彼らに私の英語は通じなかった。
- (4) What made you so angry? (BE)
どうしてそんなに怒ったのですか。
- (5) They made him president. (BE)
彼を会長に選んだ。
- (6) I think it (to be) true. (BE)
それは本当だと思う。

(5)の例については、president を省いた次の文も成立する。

- (7) They made him. (筆者作例)
彼らは彼を作った。 (筆者作例)

しかし、C がある場合とない場合で(表面上では)動詞の意味が異なっていると考えられる。その点が C であるかどうかのポイントであるとも指摘されてきている。

文はその一番大きな骨格となる文構造に主語、(述部)動詞があり、それらは主述の関係を成している。また、文には目的語が含まれている場合があり、その目的語が文中の他の要素に対して主語として働いている場合(上記の例)、従来 SVOC と呼ばれてきた。しかし、その他にも、文内の要素間には主述の関係が様々な存在する。たとえば、動名詞の意味上の主語とか、自動詞文や他動詞文の主格補語(“He returned safe”)とか、修飾関係における主述の関係とかにも存在する。それでは、目的語が文中の他の要素に対し主語として意味的に機能する場合の特徴といえ、目的語とその要素が1つの品詞(名詞など)を形成していないことである。そして、文の骨格構造の一部である主動詞 V が全体的事象を記述するものであるのに対し、目的語を意味上の主語とした主述の塊は、全体事象の中で2番目に大き

い事象であると言ってよい。そのような視点から日英語の構造を見直すと何が見えてくるのか、これがここでの目的である。ある文中要素が目的語に対して述部となる場合と、そうでない場合との違いが何か、言い換えれば、従来、文型に関わらない単なる副詞(句)と呼ばれていたものとCとの違いが本質的に何か、これを探ることが第一の課題である。

ここで、全体事象、部分事象など文が表わす事柄を「事象」と呼ぶことにしたが、これは「概念」を含め、文が表わす様々なものを代表した表現として用いている。また、文の一番大きな骨格となる文構造の動詞というのは、ルート位置の動詞と呼んでもよい。

[2] 日本語の SOCV 構造の認識

前述の英文の筆者による直訳的な日本語訳を次に示す。

- (8) あなたは自分の仕事を 喜びにするようにしなさい。 (<--- (2)) (筆者直訳)
 (9) 彼らは彼を 会長にした(選んだ)。 (<--- (5)) (筆者直訳)
 (10) 私はそれを 本当(である)と思う。 (<--- (6)) (筆者直訳)

辞書の訳では、英語の OC 部分がさまざまな形に変わっていることが分かる。しかし、当然のことながら、どの日本語訳にも、元の英文の中の OC で表わされる部分事象が含まれ、しかもそれらが固まった形で出現している。そうでなければ意味が異なってくるから当然でもある。したがって、日本語でも目的語とその直後の要素との間に主述関係があると考えられ、それに着目してみることにする。そうすると、たとえば筆者訳((8)、(9))では「A を」(O)と助詞付名詞(C)とが主述の順になっていることが確認できる。筆者が考え付く範囲で AC の部分をまとめると次のようになる。

[タイプ]	[カテゴリーの意味]
[A をBに]	移動・判断
「A をBと」	性質・判断
「A をBから」	移動・起源
「A をBへ」	移動・方向
「A をB φ」	(B が副詞のとき)
その他	

日本語の語順の自由度の高さを考えると、OとCの結合に関し、基本はOCの順で、COの場合は倒置と考えればよい。これは英語の場合も同様である。日本語でも OC が部分事象を叙述しているのではないかという認識は、これまで筆者は耳にしたことがない。主動詞が表す全体事象に対し、目的語と助詞が付いた要素とが結合し、部分事象が叙述される。しかし、英語の分析と同様に、OCは塊であるけれどもVの前に位置していることから、このOCだけの表す塊の意味は未定の部分が残っていて、その後の動詞によって初めてそれらの叙述が完全に決定されると同時に全体事象が叙述される形になっている。注目すべきは、主動詞が現れる前の部分事象が、主動詞が現れる前にある程度理解可能であるということである。また、OCがカテゴリー的な部分事象の叙述になっているのは英語のOCと共通している点も興味を引かれる点である。

上の訳を見れば、OC部分のカテゴリーの意味が右の欄に示すように述べられるのではないか。たとえば助詞「と」については、具体的に何を意味するのか、また、それが歴史的にどのように発達してきたのか、など筆者は知識を持ち合わせていないけれども、その後の動詞の表わす意味から、性質・判断の叙述の際に現れると分類できよう。性質・判断というのは、「AはBである」という関係などである。筆者にとって、助詞の中で「と」が最も意味を特定し難く感じられるが、それ以外の助詞は英語の前置詞に相当する意味を持っていると言ってよかろう。したがって、英語のSVOCとその日本語訳を比べた結果、日本語にもSOCV構造が存在する、という認識に至ったわけで、これがここでの新しい構文分析の提案の一部である。筆者はこの考察で初めてこのことの認識に至った。

日本語でもOCは近接しているという英語との共通点が見られるが、日本語のOCは英語のOCとどんな違いがあるのだろうか。それはVに対する位置関係から生じる違いであるのでは、と予想される。

筆者の訳を見ていると、「何かもの」が「どうである」ということを当然理解しているにも関わらず、全体事象の中の部分事象という認識はなく、このような英語との比較がなければ、この認識は得られなかったものである。

ここまでで、英語のSVOCと日本語のSOCVとがOCとVとの位置に関して互いに逆転しているけれども、Vが示す全体事象の中で、OCが部分事象をカテゴリー的に述べているという点で共通していることが分かった。このことにより、日本語においても、英語と同様、SOCV構造(構文、文型)の存在を認める根拠が示されたものと考えられ、このことを日本語分析に対する提案とした。

[3] 日英語の OOp 構造とそれに関わる様々な側面

前の2つの章に続き、ここでは日英語で互いに対応し合う SVOC(英語)と SOCV(日本語)とを対比させながら、それら構文の特徴を探ってみることとする。

目的語と文中の他の要素とが主述の関係を成しているかどうかということが OC 構造であるかどうかの判断基準になる。そのことにより、紛らわしく見えるような前置詞句の役割が判断できる可能性がある。とくに文構造に関与しない副詞と C との区別もこの視点から見えてくるのではと考えられる。また、目的語の V に対する関係も再認識させられる。まず、wipe の例文を見てみよう。

(11) Wipe your feet on the mat when you come in.

入る時は足をマットでふきなさい。

(12) Wipe your hands clean.

手をきれいにふきなさい。

(13) She wiped her hand across her forehead.

彼女は額を手でぬぐった。

Wipe の最初の文(11)は、通常 SVOC の文とは見なされない。それは

(14) Wipe your feet.

が成立し、この意味が例文の中の“wipe your feet”の意味と同じだからである。先の例((5)、(7))で言うと、make のときのような違いが生じないからである。しかし、残りの例((12)、(13))と同じように、目的語(O)とその後の要素が主述の関係を成している。したがって、ここで O の後の部分を目的(格)叙述部 Op(Object Predicate)と名付けると、Op は C の拡張であり、OOp 構造を考える必然性があると考えられる。

このように、筆者は SVOC 構文以外にも同類の構造があるにも関わらず、それらを区別することに疑問を抱いていた。この Op という範疇がその疑問を解決する文内要素であり、Op に共通している特徴を理解することが日英語の文構造の理解に貢献するものと期待される。

この立場から上の例文を見直すと、動詞 V で様態的全体事象が叙述され、その中での重要な部分事象が存在すれば、それが OOp の形で組み込まれている、ということになる。その時重要なのは、全体事象の中で目的語 O は主語 S に次ぐ第2の prominent な名詞要素である、ということ。このことはすでに指摘されている事柄である。また、OOp で表わそうとしている部分事象が、全体事象に対してどの程度の必然性、論理性あるいは関連性を持っているか(これだけでも研究する価値があると考えられるが)に従って次のような形を取らざるをえなくなる場合が出てくる。

(15) SVO+副詞節(句)

(例として so that ~の目的を表わす句)

これらの使い分けの細かな条件まではここで検討する余裕はない。

(a) <Op の判別>

次の put の文も、通常 SVOC 構文とは捉えられていない。

(16) I forgot to put a stamp on the envelope.

封筒に切手をはるのを忘れた。

しかし、文末の場所を示す項(on the envelope)は、動詞 put に対して完全に任意なものというより、ほとんど必須の項目であることもこれまで指摘されてきている。筆者としては、目的語 O とその後の要素との間に主述の関係が成立していることから、この主述の部分も、当然、OOp に含まれる。そうすると、どういうことになるか。Op としては、目的語と主述の関係にある文内要素であるという条件だけである。すると Op の定義から、O と Op との間には主述の関係が常に存在する。この主述の部分が、動詞 V の表わす全体事象の中の部分事象を叙述している。言い換えれば、英語においては動詞 V で全体事象が様態的に叙述され、それに続く OOp の部分でその部分事象が叙述され、全体そしてそれに続いて部分的補足という順の2つのブロックで構成されている構文である、と見るができるということである。(ここで使っている「部分事象」という語は、広い意味での部分を意味していて、代表的に使用しているだけであることを断っておく。)

ここで文内要素間の関係を見ておこう。例(16)で、主語(I)および“a stamp”と前置詞句(on the envelope)との関係については次のようになる。

(A) I BE on the envelope. (成立しない)

(B) A stamp BE on the envelope. (成立する)

(A)は成立しないと言ってよい。全体が1つの事象の中にあるので全く関係がないとは言えないが、この関係には少なくとも主張性はない。したがって、この場合、on the envelope は主語(S)ではなく、目的語(O)と強く結び付いていると言える。従って OOp の構造と考える。しかし、次に挙げた例では、逆に、目的語(O)とその後の要素とは主述の関係が完全にはないとは言えないが、動詞との関係のほうが強く、その部分にこそ主張性が置かれていると言える。したがって、次の例は SVO 構造であると判断する。

(17) I learned French in six weeks.

6週間でフランス語を身に付けた。

(18) I can't hear you over the roar of the engine.

エンジンのうる音にかき消されてあなたの言うことが聞こえません。

(190) I did it for money alone.

ただ儲けのためにだけそれをした。

また、これらの例で下線部は、それ以外の全部に関わっているということで SVOOp 構造ではないと言ってもよいと考えられる。

<授与構文>

同じように考えると、従来、授与構文の SVOO や SVO+(to-置詞句)と分類されてきたものも SVOOp 構文の一部と見ることができる。

(20) I handed him a map. = I handed a map to him.

私は地図を手渡した。

これらの文において、O と Op とは HAVE か GO の関係にある。

O HAVE Op (<--- him a map)

O GO Op (<--- a map to him)

ここで、間接目的語を O、直接目的語を Op と見たのは、前者が先に、後者が後に位置づけられているからである。

筆者が英語話者から得た感触では、SVOO と SVOC の区別を意識していないようである。そのことは決定的な役割を果たすほどのものではなからうが、これら授与構文を SVOOp にまとめることをサポートすることにはなるであろう。

これまでの研究で、SVOO 構文においては、O の位置に人が来ることを前提とした、人と人との関係に重点を置いた表現であると指摘されているが、それは O と Op とが所有の HAVE で結合しているところに根ざしていると言えるのではなからうか。

<provide 文>

次に、Op の判断がやや紛らわしいと思われる例を挙げてみることにする。

(21) Cows provide us with milk.

雌牛はミルクを供給する。

(22) They robbed the man of his watch.

彼らはその男から腕時計を奪った。

(23) I usually mix a little brandy with my coffee.

私は普通コーヒーにブランデーを少し入れます。

これらは何も問題なく SVOOp の分析で理解できる。なぜなら、目的語(us)と Op(with milk)が主述の関係があるからである。前置詞 with は近接の意味で、of は原義である分離の意味である。

(24) us BE with milk

次の例の道具としての with 句については主語との近接であって、目的語との近接ではない。この道具の部分は構造に関与しない副詞ということになる。主語や動詞との関係が強く、目的語とは直接的に結び付けられていないと見ることができる。上の例で OOp は結果の状態を表しているが、“meat with a knife”は結果の状態とは異なっているということもできよう。

(25) cut meat with a knife

ナイフで肉を切る

(with は、原義の「～に対して」と「～と共に」の両方で理解可能であり、どちらの意味かはここでは追求しないことにする。)

例文(21)に挙げた provide 文については、with B のところは結果を表していると考え、この点は今後検討したいと思っているが、このことから OOp 構造はすべて結果について述べられているのではないかという予測が立つ。

このように文型に関与しない修飾というのは、目的語との主述の関係とは決定的に異なっていることを示すことができたと考える。

<pat me on the shoulder 文>

(26) She patted him on the cheek affectionately.

彼女は彼のほおをやさしくなでた。

(27) I took him by the arm.

彼の腕を押えた。

これも、単文の形で、人を主語、目的語に据えて人間どうしの関係に視点を置いて表現すると同時に、動作の影響を受けた直接的な場所も示すことができる文になっている。その点で provide 文などと同じであるが、下線部(on the cheek)は Op とは考えられない。下線部は主動詞Vを修飾している副詞であることは、<provide 文>の中での考察から分かる。これについては、次のような受動文に対応する日本文が存在することに興味を惹かれる。この受動文の存在意義が大きいのではないかと思われる。

(28) I was patted on the shoulder.

私は肩を叩かれた。

この受動文が元になっている能動文の OOp 構造の特徴をよく表わしていることは後ほど示すことにする。

(b) <OOp 構造の多様な側面>

先の wipe の例からも SVOOp 構造においては OOp が主述の関係の部分事象を形成するということだけが Op であるかどうかの判断基準である。すると、SV と OOp とがブロック的に並んで機能していると見られることもできる。SV で全体事象が示され、その後、その部分事象を wipe の例のように複数の候補の中から選択できる場合もあるわけである。そのときの O の成立条件は、O が V の作用を受ける名詞、Op は O に対応する述部ということである。Wipe の例文で、Op の中に表れる前置詞の多様性がそのことの正しさを示している。このように OOp のところに部分事象を示すブロック構造があるが故に、wipe のように多様な部分事象の叙述が可能になるのであろう。先の wipe の例文の日本語訳は、SOV 構造と見られるが、英文とは構造が変わっている。そうしなければ普通の日本語にならず、この点での日英語の違いが窺い見られる。以下では日英語の OOp の様々な側面を見ることにする。

<受動文> HAVE 型、GO 型

次の see の例を見てみよう。例文(30)は受動化の変形がなされた文である。

(29) We saw him walking across the street.

(30) He was seen walking across the street.

例文(30)では、元の能動文(29)の Op 部分が (be+完了形を1つの自動詞と見れば)いわゆる主格補語の働きをしていることが分かる。このことから、元の OOp 構造が主述の関係であることが明瞭に示されている。筆者は、受動文は能動文を基にして理解すべきで構造分析をしないことが暗黙の了解になっているように感じている。しかし、受動態動詞の後の部分は、受動態動詞の修飾であるのか、それとも主格補語であるのか、という違いは強調してよいのではないか。それは能動文での O と Op との関係があるかないかということと同じである。OOp は単独で見ればカテゴリー的な意味を持った主述の事象を示すだけであるが、そうであるがゆえに、少数のタイプに類型化されているというメリットにもなっている。部分事象としては、これらのタイプで表現できる程度の内容で十分であるということである。これも筆者がこの考察の中で到達することができた認識である。

SV \overline{O} Op

\overline{S} V'Op (V'はVの受動態動詞) ($\overline{O} = \overline{S}$)

元の能動文では主語(S)の人が目的語(O)の人に対する影響・作用を示す形になっている。Provide や rob の文では、受動態にしたときに、人を主語にした表現になっている。日本語においても、人を目的語にする場合や、人が主語の位置にある受動態においては、英語の provide や rob の文構造の今述べたような特徴が見られる。それらは日英語で共通していることが分かる。

(31) 私は彼女の顔を見た。

(能動)

(32) 彼女は顔を見られた。 (受動)

(33) 彼女の顔はもう二度と見られない。 (受動)

つまり、日英語共に、受動態において人を主語にした構造が使用される場合があるが、英語ではその受動文に1対1に対応する能動文が存在するが、日本語では構造(文型)を変える形で実現している。

そのように考えると、provide や rob はそれぞれ give や steal を同義語として持っていることから、受動文の構造的な有用性が能動文の存在意義の1つになっているのではないかと考えられる。言い換えれば、受動文において、能動文の構造 SVOOp の存在意義は、受動文の有用性から来ている側面があると言えそうである。

(34) We have now been provided with everything we need.

<Take 特殊文>

次の take の例文を見てみよう。

(35) She took my hand. (原義)

彼女は私の手を取った。

(36) Will this bus take me to the station? (拡張・省略)

このバスは駅に行きますか。

(37) take to the streets (拡張・省略)

(デモなどで)街に繰り出す

Take が「捕まえる」、「取る」を原義としていて、例文(36)の take の用法は SVOOp の構文の力による拡張になっていると見ることができるのではないかと考えられる。そのように理解すれば、この場合も、take の意味を「持って行く」などと考えなくてもよいということで、これは重要なことであると考えられる。例文(37)は

(38) take oneself to ~

の SVOOp 構造の O である oneself 部分の省略と見ることで take to の部分が理解可能になる。部分事象を叙述する箇所の意味的な主語(O)が全体事象の主語(S)と一致する特殊例で、一致するがゆえに省略されることが考えられる。

筆者にとって不思議に感じられた、このような take の用法が、SVOOp 構造を元になっていると見なせば、統一的に説明がつくことが示せたと思われる。

<使役文> φ 型、BE 型

次に get, have, make の使役用法の例文を見てみよう。

(39) Get your friend to help you.

友だちに頼んで助力してもらいなさい。

(40) What makes you think so?

なんでそう思うのか。

(41) I won't have you smoking at your age.

おまえの年でタバコをすってもらいたくない。

これらの構造も SVOOp と見ればよいが、それぞれの動詞の原義が「得る」、「作る」、「持つ」である。SV と OOp とがプロトタイプ的に機能していると見ると、初めてこれら各使役構文はそれぞれの動詞の原義で理解することができる。「得る」や「持つ」では S の使役性が弱く、「作る」では強いことがこれらの動詞の使役性の強弱にも反映されていることが分かる。目的語は動作・影響を直接的に受けるものになっていて、ここでも構文の持っている意味というものが大きく働いてこれら使役文が出来上がっていることが分かる。つまり、全体事象と部分事象が目的語を介して連結されているということをよく示していると考えられる。

動詞の意味が分かれば、今まで目にしたことのない動詞であっても、動詞が使われる構文が予測されるようになっていくと筆者は強く感じる。既知の動詞の文がプロトタイプとして働くのか、それともコア的なものが形成されているのか、それらは恐らく各自の言語の使用経験の中で徐々に絡み合っていて働いていると筆者は考える。言語経験の積み重ねで新しい動詞に対し、その意味から各言語の持っている構文を選択する能力を当該言語話者は身に付けていると考えるものである。各構文の意味が十分身に付いている場合、表現しようとしている全体事象、そしてその中の部分事象が計算され、動詞及びその可能な文構造(文型)が選択できるようになっていると考えられる。

(c) <00p スロットの存在> 日本語

ここまで、日本文においても部分事象を述べる位置が文内に存在し、そこに OOp という構造の枠が存在することを主張してきた。しかし動詞の位置が英語と異なるため、それに起因する違いがどのようなものであるかをここで検討してみたい。

～は[～を～(に、と)]V (日本語)

動詞に対し、その意味から「～を～(に、と、…)」の部分事象の叙述が上のように付加できる場合がある。その場合の原理を考えてみよう。

複雑な現象、概念を一語で記述できる動詞というのは非常に便利であるが、その現象、概念の中に部分事象が内在する場合、それを叙述するのに、動詞によって様々な項パターンを取られるのではなく、少数のブロック構造にとどめ、できるだけ個別制約が少ないほうが望ましい。歴史的にそのように収束したものと想像される。2つの文に分けても表現できるが、それは一般に面倒になるという欠点がある。この点で英語は部分事象を簡潔に叙述する単文形式の SVOOp 構造を大きく発達させ、日本語は、動詞を複合動詞化させて SOOpV 文を作る方策を大きく発達させていると見ることができる。これら異なる手法は、部分事象を記述するブロック部分が動詞 V に対して前か後かの違いから来るものではないかと推測される。(このことは多くの言語を横断的に比較することにより結論が下せることも知れない。) 日英語を比較する限り、OOp はこの順でしかも近接した形で出現するという共通する特徴が見られる。Op の位置に現れる「に」や「と」が「より」や「から」などと異なり意味的要素が少なく、特別な格表示であることを示しているようにも見える。しかし、英語において、Op の位置に様々な格形が入ることからも、日本語で Op の枠の中に「～に」が表れると見られることもできる。すなわち Op が文構造の中で1つの位置を占め、その中に助詞が表れると見るわけである。「に」については場所を示す助詞と考えてよいのではないかと。言い換えれば、英語と同じく、動詞の直前の位置が OOp のスロットになっていると言えよう。「を」については格助詞と考えてよいが、次の例に示すように「を」がない形もあり、やはり O スロットの中に「を」格が現れると考えるべきではないか。

(42) 私は、退学、やむなしと考えます。(筆者作例)

その意味では主語 S もそのように捉えられる。たとえば、英語の SVO という文型において、名詞の主格形が S の位置に現れ、対格形が O の位置に現れる、ということに相当する。S や O の構文内の各位置と、そこに現れる名詞の主格、対格が通常同じであるに過ぎない、ということが認識される。

このこととの関連で授受表現を見ると、「に」がどのような働きをしているのか見えてくるのではないかと。

(43) 私はこれを彼にもらった。(筆者作例)

「に」は着点表示と捉えがちであるが、そしてそのことは多くの事例を見れば尤もにも見えるが、単に場所を示す助詞とみたらどうか。「は」、「を」と共存する形で「に」が使用されるとき、それが Op の位置に現れるとき、主動詞の作用を受けて着点や起点を示すことになる。はっきりと起点の意味を示す助詞「から」と比べると「に」が理解できるのではないかと。したがって、「に」が格を表示していると考えべきではないという結論に至る。

ここに至って、筆者が長く求めていた文構造の捉え方が得られた。

動詞を基に事象を記述しようとしたとき、その動詞が他動性を有している場合、その部分事象が認識できれば

英語 SV0Op

日本語 S0OpV

の文構造が存在し、それが簡潔な単文の文構造として使用できる可能性がある。

部分事象と言えるほど密接でない事象であれば、単文構造から離れ、複文や重文あるいは2文に分けられることになる。

日本語においては、助詞が動詞との関係を示すものという見方がこれまでの認識ではなかろうか。筆者もずっとそのように捉えていた。そうすると、「は」、「を」、「に」などの助詞は主動詞に対する格を表わすものということになる。しかし、日本語も、英語と同様、位置的な OOp の枠が構文内に存在し、そこで助詞は主動詞に対してではなく OOp 内で意味的な働きをしている、という新しい認識を提案するものである。このような捉え方は、図らずも生成文法の考え方と一致しているのではないかとと思われる。

(d) <部分事象と主動詞の位置関係>

動詞が様態を含めた全体事象を示すものであり、OOp がその部分事象を表すものであるとみた場合、S は何なのか。動詞が表す様態に対し、その原因、主体、動作主などを表している。これは VOOOp の外部的な要素である。一方、O を意味的主語に、Op をその述部とした OOp 構造はその部分事象を叙述するものであり、動詞 V が示す様態的全体事

象の中の重要な部分を叙述するものである。

そのような観点からは、英語では動詞にいわゆる文型パターン情報が付加されていると見る必要はないのではないか。ここで述べているようにブロック構造に意味があり、その構造に意味的に整合する動詞がその構造で使われ、文として出現すると見るほうがよいであろう。(辞書の記載は、当然のことながら、正にその逆になっている。)英語においては、動詞の作用がその後の OC 部分に及ぶということがきわめて重要なポイントであろう。したがって、英語では、OCSV、OSVC、CSVO などの語順は生じ難いと推測される。逆に日本語は OOp が動詞 V の前に位置するため、OOp だけの段階ではその部分事象が確定できない。部分事象が動詞の前に来るため、先にその部分を述べてしまうと様態動詞 V とは整合しなくなる場合に、動詞を補うように働くのが複合動詞化と見ることができる(次の例文参照)。(これは必ずしも話者の発話中の意識を言っているものではない。)

(44) 額から水をぬぐい取った。

(45)?額から水をぬぐった。

英語では部分事象が動詞 V の後に来るため、もはやその中に様態記述を繰り返す必要はない。すでに主動詞 V が様態を述べているからである。ところが日本語では、主動詞 V が表れる前に部分事象が述べられる形であるため、少数の助詞のみで部分事象がカテゴリー的に叙述され、主動詞 V で全体的様態を述べると同時に部分事象の意味を確定する、という形になっている。この点からいえば、英語の方が合理的であろう。日本語の方が未確定の部分を先に出し、それを後から確定しなければならず、緊張を作り出す形になっていると思われる。

もし、日本語の複合動詞の発達が一時期に起こったとすれば、それは 1 文の中に部分事象を取り込む手法の発達、つまり、1 文の情報量を増加させる目的で起こったと推測できそうである。その点から日本語の変化に関する研究に今後注目してみたい。

その具体例を見てみよう。

「～を～から引っ張り出す」 = “pull ~ out of ~”

日本語で、「～を～から」だけでは部分事象として確定しない。それはそのままでは、不十分ながら様々な状況、事象、出来事、概念などを表わし得るからである。「引っ張る」が「出す」と結合して現れることにより部分事象の方も位置変化の形で確定することになる。したがって、日本語の複合動詞の役割の1つは部分事象を意味的に確定するための仕組みと見ることができるのではないか。一方、英語も、「out of ~」のところが、直前の目的語の述部となり、pull の意味から目的語が示す対象の移動を示すことが確定する。動詞が先に現れて全体的様態が示され、部分事象の補足が後に続く形になっている。

意味的に部分事象を内包しているような動詞に対しては、日英語できれいな対応が見られる、と言えそうである。その時は、日本語で複合動詞を使わなくてもよいからである。たとえば「～を～(の上)に置く」= “to put something on something”では、上記のような複合動詞化は必要ない。日英語共に put(置く)に「something BE on something」の部分事象の存在が内包されているからである。

つまり、

英語 — 目的語の後の位置が、目的語に対する述部位置として決まっている。前置されている主動詞の意味が部分事象の存在を予告し、その意味を確定する。

日本語 — 部分事象 OOp は、主動詞 V の前に位置するため、部分事象はカテゴリー的な意味の状態で pending 状態にならざるを得ない。後置された動詞がその意味を完結する。

(日本語でのこの構造に内在するメリットは、V の前の O や Op の位置で、文脈的導入的機能を果たすことができることで、これは日本語の他の現象とも共通することを述べておきたい。)

(e) <英語の VOp 結合 vs. 日本語の OpV 結合> 新動詞の生産性

Op の文内での移動の可能性を探ることにする。OOp はこの順序で近接して出現するのが原則であると考え、OOp が分離するとどうなるか。take out を例に取って考察してみよう。

Take out は V と Op が結合したものと考えられる。V(OOp)となるべきところを(VOp)O となっているということである。そうすると、VOp は結合して 1 つの動詞として振る舞うことができ、その結果 VOp 全体が目的語 O を取ると見ることができるようになる(異分析)。

S(VOp)O ---> SV'O (VOp = V')

VOp は 1 つの他動詞として働くことが分かる。よって、SV(OOp)の構造が S(VOp)O と分析され、SVO 型と同じになり、そのことは新しい他動詞を作り出す仕組みが英語に備わっていることを示している。

(46) Barton took out the life insurance policy on Debra.

バートンはデブラに生命保険をかけた。

この VOp は、通常、動詞の成句と言われているものであるが、新しい動詞を作る重要な役割を果たして、英語の大きな力になっていると感じざるを得ない。

日本語でこれに相当するのは複合動詞化である。英語の場合と異なり、これは SOOpV を使用可能にする仕組みである。言い換えれば部分事象を付加的に述べるための重要な手法になっていると見ることができる。

(f) <結果叙述の付加> 着点の扱いの特殊性

英語では、目的語 O の後の位置に結果を示すものが来ることがよくある、これも Op の1つの現れと見ることができないだろうか。

(47) The blow knocked him senseless.

その一撃で彼は気絶した。

これと関連して、結果叙述の自動詞版と見られる文も見られる。

(48) John ran behind the wall. (筆者作例)

彼は壁の後ろで走った。

彼は壁の後ろへ走って行った。(これも成立！)

Cf. John ran from behind the wall.

例文(48)の自動詞文において、動詞の後に現れる behind the wall が ran した後の結果を示すことが多い(2つ目の訳)。(様態的)動詞で行為の様態が述べられた後で、その結果を示す部分が簡略化された形で現れることは、ここで扱っている他動詞文の結果を示す Op と共通していると考えられないだろうか。この場合も、O と結果部分が近接した形で現れることから SVOOp 構造に入れることができよう。日本語では結果を示すことを明示するには主動詞が文末に来なければならないことから、単文形式ではこの構造の成立は難しいと論理的に考えられるが、実際もそのようであると筆者は感じている。たとえば、日本語では「走って行った」と結果に呼応するように第2訳の複合動詞を使う手法がある。一般論として(汎言語的に)、構文上、動詞の後に現れれば時間的に後に、先に現れる場合は有標の扱いを受ける、という原則が働いていると考えられる。

別の解釈としては

(49) to behind the wall

のように to があり、前置詞が重なるときよく起こる現象で、一方が表に出て来ないとも考えられるが、やはり着点と起点の扱いの違いで、英語では、文内で後の出現であるから、当然のように結果の部分が文末に現れる、と考えられる。英語に比べ日本語は、結果叙述が簡単に表現できないのは、単文形式の中でそれを動詞の前に位置させなければならないからと考えられる。

(g) <部分事象の分類> 目的語の多様性

SVOOp の OOp が部分事象を表わすという視点からの分析に基づき考察していくと、O と Op との関係は(現段階で)次のほぼ4つに分類できることが分かった。

- ① BE 状態型
- ② Have 所有型
- ③ Go 移動型
- ④ (必要なし) 完備型

先に考察したように、SVOO なども SVOOp 構造に含めることができることから、他動詞文に関する構造は SVO と SVOOp の大きく2つに分けることができることになる。この2つの違いは、動詞の意味に起因し、動詞の表わす全体事象の中に部分事象があるかないか、またどのような部分事象であるかの違いが関係し、また、部分事象を示した方がよいかどうかの判断の違いなどが関係し、同じ動詞でも両方の構造を取ることもある。

このことは何を意味しているのだろうか。部分事象が主動詞 V の表わす全体事象の中の部分事象を述べるものであるが、それがカテゴリー的にほぼ4つに分類されるわけである。人間が単文構造で表現しようとするときに

全体的様態+(その中の)部分事象

がほぼ4つに分類されるということで、これは人間の認識がどうなっているか、ということを示していると考えられるのではなかろうか。とくに英語においては、目的語の多様性に気づかされる wipe の例のように、OOp が部分事象であり、O は

動詞の動作を受けるものという条件があれば、比較的自由に目的語 O となり得る可能性があるということである。我々日本人にとって英語の目的語に驚かされることが多いが、このことがその一因ではなかろうか。典型的には、make、have、get などの使役用法での目的語 O である。O は動詞 V の作用を強く受ける対象になっているが、同時にこれらの動詞が表わす全体事象の中の部分事象の主語でもあり、先に述べたように、この O が2つのブロックをつなぐ働きをしている。これらの動詞の SVO 文型では、O が動詞の作用を受けるだけでなく、全体的に捉えられる対象を指示する。SVO と SVOOp のとき、動詞の意味が異なると一般に見られているが、筆者は共に動詞の基本の意味が発揮され、構造(構文)の力が働いて SVOOp の使役文が成立していると考えられるわけである。

参考文献

- 1) ジーニアス英和大辞典 2001年 大修館書店
- 2) リーダーズ英和辞典第2版 1999年 研究社

Predicate Position against the Object in English and Japanese (Two Structure Types for the Transitive Verb Sentences)

Makoto KOMOTO

Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,

Okayama University of Science

1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

(Received October 1, 2012; accepted November 1, 2012)

If we regard the transitive verb as depicting the whole event aimed at by the sentence, we can see the object (O) and its predicate (C) in the sentence as depicting its partial event. Looking from this perspective, I have found that the sentences containing a transitive verb can be classified into two groups: SVO type and the extended type of SVOC. The findings in this research include that there are four different categories for the classification of the partial events in English and Japanese, that Japanese has a slot for OC within a transitive sentence as in English and that the passive sentence for a SVOC sentence in English is used so as to give the primary position (attention) to the OC partial event within the SVOC sentence.